

課題を抱える少年への援助の継続によるボランティアの意識の変容と
学び—BBS(Big Brothers and Sisters) 会「ともだち活動」援助者の当
事者性の深まりに着目して—

B2H004 間野 百子

主査：小林美由紀先生 副査：長谷川俊雄先生 廣澤満之先生 西園マーハ文先生

1. 研究の背景と目的

課題を抱える少年を対象とした援助は様々な形態で行われている。少年の課題が多様化・個別化する中、学校教育や社会教育の現場におけるボランティア援助者に対する期待は高まっている。特に、非行を抱える少年は、地域社会内において立ち直りを図る際に、社会的に排除されがちとなるため、少年を支えながら、一般市民と少年の橋渡しをする援助者の役割は大きい。

そこで、本研究では、非行少年の立ち直りを個別・継続的に支える援助者の発達や学びを明らかにすることを目的とした。その理由は、少年の立ち直りを支援することが、少年や援助者の学び・発達を促し、元非行少年を包摂した、「共生社会」の構築に資すると考えたからである。

ボランティアの学びを検討するにあたっては、ボランティア学習において鍵となる、「当事者性」という概念に着目した。そこでの学びは、被援助者と同質の課題を体験しておらず、「問題の核心から遠ざけられていた学習者が、問題の核心に触れることによって『当事者性』を持ち、深めていく変容のプロセス」の中に生じてくると定義されている。

以上を踏まえ本研究では、非行少年の援助者が活動の中でどのような体験を積み重ねながら、対象の少年や非行問題に対する理解を深めていくのかについて、戦後の動乱期から、非行少年の支援を展開してきた、日本の BBS 運動 (Big Brothers and Sisters Movement、以下 BBS) に焦点をあてて検討した。

BBS は、法務省の支援のもと、更生保護事業における民間ボランティア団体として米国の BBBS(Big Brothers Big Sisters) 運動を範とした、少年支援活動を 1947 年より展開してきた。BBS の中軸の活動である、「ともだち活動」では、「メンタリング(mentoring)」という、個別・継続的な支援方法が取り入れられ、会員は、非行を抱える少年と同じ目の高さに立つ、「ともだち」として、少年の地域社会内における立ち直りを支援している。

BBS の課題として、学生会員の約半数が卒業時に退会し、長期継続に結びつきにくいこと、社会人会員の経験や知識が後輩に十分に伝達できていないこと、会員の活動体験を通しての学びや発達が明らかにされておらず、少年の立ち直り支援の意味が社会的に周知されていないことなどを指摘できる。

ここまでの論議を受けて、本研究では、非行少年との接点や非行問題への関心・理解が必ずしも高くはなかった会員が、活動の継続をとおして、どのような援助成果を認識していくのか、ならびに、BBS 会入会から、「ともだち活動」における少年との出会い、交流の深まり、ケースの終了、BBS の継続というプロセスにおいて、会員が乗り越えていく課題や、非行問題に対する認識の変容について明らかにすることを目的とした。

この目的のために、以下の課題を掲げて、「ともだち活動」経験者への質問紙調査、及びインタビュー調査を実施した。第一の課題は、会員の活動開始前の非行少年との接点や非行問題への関心・理解の差異が、活動を通じた学びにどのように反映されるのかについてである。第二は、長期継続者の援助成果認識の継時的な変化である。そして第三は、活動を継続していく中で、会員の非行問題に対する意識がどのように変容していったのかについてである。さらに、若手の学生会員とベテランの社会人会員とでは、担当するケースの質や社会的背景が異なる中、交流の深め方や乗り越えてきた課題に相違点や共通点が見出されるのかについてである。

上述の課題について援助者の学びを通して明らかにすることにより、非行臨床におけるボランティアの役割やメンタリングという二者間の基礎集団が、共生社会の構成員として包摂されていくことの意義を示唆した。

2. 研究方法

日米の運動の歴史的展開やボランティア活動における学習理論等は、先行研究や BBS 関連の資料をとおして概説し、日本の運動の特色と課題を明らかにした。

第一及び第二の課題に関しては、「ともだち活動」経験者を対象として実施した質問紙調査に基づいて分析した。

第三の課題に関しては、「ともだち活動」経験者を対象として実施した、インタビュー調査の結果を、「複線経路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA)」を用いて質的に分析した。そこでは、活動体験者の語りを聞く「歴史的構造化ご招待(Historically Structured Inviting:HSI)」を行い、協力者 5 名 (学生 3 名、社会人 2 名) の BBS 会への入会から少年との交流を経て現在に至るプロセスと意識の変容を、「複線経路・等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling: TEM)」を用いて図式化した。TEM では、「活動を継続する」を「等至点 (Equifinality Point: EFP)」、「両極化した等至点 (P-EFP)」は、「活動を離脱する」とし、5 名の「分岐点(Bifurcation Point:BFP)」、「必須通過点(Obligatory Passage Point:OBP)」、「社会的方向づけ(Social Direction: SD)」、「社会的助勢(Social Guidance:SG)」を抽出した。さらに、TEM で設定した、「分岐点」における意識の変容については、「発生の 3 層モデル(Three Layers Model

of Genesis:TLMG)」を用いて可視化した。

双方の調査の実施については、白梅学園大学の研究倫理審査委員会、及び日本BBS連盟の理事会での承認を得ている。

3. 研究結果

日本の運動の特徴として、直接的な非行体験を有する会員は少数であること、これまでの研究では、少年と会員との交流プロセスの検討が不十分であることなどを明らかにした。

質問紙調査の回答数は71通で回収率は34.1%、有効回答率はこのうち92.2%であった。

第一の課題に関しては、「BBS運動に関心を覚える契機となった身の回りの状況や社会情勢」ならびに「活動を通して学んだこと」への自由記述回答をコード化し、活動開始前の援助者の非行少年との接点や非行問題への関心・理解とその後の学びの関係を検討した。前者の有効回答者66名を、非行少年との接点や非行問題への関心・理解の程度に基づいて、「間接的当事者」（自らは直接の非行体験を有してはいないが、非行傾向・環境に関する直接的体験に関する言及あり）18名、「関心あり」（直接・間接ともに当事者体験は有していないが、少年を取り巻く環境への関心についての言及あり）34名、「未知の世界」（直接・間接ともに当事者体験を有さず、非行問題は未知の世界であった人）14名に分けた。「学び」に関する問いへの68名の記述内容からは、協議のうえ、6つのコード（「受容性・多様性の理解」「人間関係（向き合う、聴く、関わる、逃げないことの大切さ）」「人間関係（距離を保つ、待つ、引いてみることの大切さ）」「非行少年特有の状況や心情理解」「自分自身への好影響」「家庭環境の影響、社会の矛盾」）が抽出された。次に、先の3群と「学び」のコードとのクロス集計と記述内容を分析した。その結果、Fisherの正確検定においては、3群間と各コード間においては、統計的な有意差は認められなかった。さらに、「学び」のコードのうち、3群すべてで最も該当者の割合が高かった、「非行少年特有の状況や心情理解」の回答例を検討した結果、「間接的当事者」群では、1対1で向き合ったとき、少年がどのような心情でいるかに注目しており、「関心あり」群は、非行少年が仲間のもとではなく、自分の方に来てくれるかという関係性への関心が示唆された。「未知の世界」群では、目の前にいる少年と自身の生育環境の違いを認識することから始まり、少年からの対応を待つことの必要性を学んだことが示唆された。

第二の課題に関しては、援助成果に関する15の質問項目の選択数を活動期間3期（初期・中期・現在）毎に算出し、各期に対する回答にCochranのQ検定を適用した。検定の結果、差のある傾向($P<0.1$)が認められた項目については、初期と中期、初期と現在、中期と現在の選択率の差に、McNemar検定を適用した。

その結果、最も顕著な差がみられたのは、「初期」と「中期」で、「少年の自立や成長をみることが生きがいとなった」(P=0.039)、ならびに「若年者との意思疎通や職場での人間関係を円滑に運べるようになった」(P=0.004)には有意差が、「他者の気持ちや悩みをじっくりと聴き、相手の心境を推し量りながら、対応する能力が向上した」には差のある傾向が認められ(P=0.063)、中期には初期とは異なる意識が育つことが示唆された。

第三の「少年と会員の相互交流プロセス」については、第1等至点には、「活動を離脱する」(学生)；「社会人として活動を継続する」(社会人)、第2等至点(社会人のみ)には、「ライフワークとして活動を継続する」が抽出された。両極化した等至点には「活動を離脱する」が抽出された。TEM図により、学生会員・社会人会員それぞれが、BFP(分岐点)、OBP(必須通過点)を進んでいくプロセスにおいて、SD(社会的方向づけ)とSG(社会的助勢)によるせめぎあいを確認できた。活動の継続には、学生会員・社会人会員ともに活動に対する家族・友人の理解が必要であること、学生会員は少年支援に対する世間一般の評価が、社会人会員は、少年の親や友人との関係、職場での理解不足がSD(社会的方向づけ)として機能していた。他方、双方ともに、関係者の協力がSG(社会的助勢)として機能しており、少年理解が進むと、少年の力になりたいという心情に加えて、課題を抱える少年の早期ケアの必要性について言及していた。

TLMG図の第1層には、TEM図で抽出されたBFP(分岐点)を配置した。第2層には、各分岐点における意識を示し、第3層では、それらを統合しての信念・価値観として「地域社会内における少年の心の居場所・拠り所の必要性」；「少年の可能性を掘り起こすBBS会員の役割」(社会人会員)；「少年の身近な存在としての若手会員独自の役割」；「早期予防・ケアの必要性」を抽出した。

調査の考察

第一に、活動前の非行少年との接点や非行問題への関心・理解の程度により、学びの内容が質的に異なり、少年との関係を深めていくうえでの距離の取り方、コミュニケーションの図り方などに差異のあることが示唆された。

第二に、会員が「ともだち活動」の長期継続を通して、会員が少年を取り巻く家庭・社会環境の課題に目覚め、第三者が少年を支援することの意味について理解する、当事者性が深められていく学びのプロセスが示唆された。なぜなら、BBS運動特有の援助成果である、非行問題への関心を示す3項目において、「初期」「中期」「現在」へと年数を重ねるに連れて選択率が上昇していたからである。

第三に、学生会員と社会人会員には、時代背景や少年との人間関係の密度による相違が見られた。学生会員は、非行少年を援助していることを公言しにくいときがあり、その捉え方は、非行少年が周囲の差別感情に対峙する時の感覚に呼応

することが示唆された。一方で、TLMGの意識レベルにおいては、双方共に課題を乗り越えながら少年問題への認識を深めていく過程で、少年への早期ケアの必要性を実感していた。

総括

文献研究と調査結果を踏まえ、以下を示唆することができた。

第一に、活動を通して、少年と会員のあいだに「当事者性を深め合う関係」が芽生えていくことが活動を成功裏に進めるうえでの鍵となる点である。少年との相互交流を通して、会員の非行問題に対する学びが深まっていたのみならず、活動開始時には自らの状況を客観視できていなかった少年が、自ら課題の軽減・解決に向けて主体的に取り組んでいた。

第二に、非行少年を支援するボランティア特有の葛藤や課題についてである。会員は、少年と会員の相互関係の深まりにより、援助成果（生きがいや人間関係の広がり等）が及ぶことを認識していた。しかし一方で、少年とともに第三者との接点を試みる際に、差別や偏見を経験したり、自らの活動を公言しにくいという葛藤を抱えていたのである。

第三に、少年と会員という二者間の相互関係の発展性について示した点である。発展性とは、二者関係の中に徐々に第三者との関わりが生じ、少年が二者関係を越えた世界で生活を営むようになり、元非行少年を包摂した共生社会の構成員として生活していくことを意味する。

以上より、現BBS会員には、課題を乗り越え、活動を継続するうえでの参考点を、BBS会には人材養成のあり方を示唆できたと考える。さらに、非行少年の支援は、被害者への配慮を要するため、活動の成果を示すことにより、少年の地域社会内における立ち直りや彼らの援助者に対する世間一般の理解を深めることにも寄与できたと考える。

研究の限界と課題

研究の限界の第一は、調査協力者が限定的であった点である。調査協力者をBBS会員のうち、「ともだち活動」の経験者と狭めたため、外部の研究者がアクセスすることには限界があった。第二に、協力者は、BBS運動の社会的役割についての意識が高い（または高めた）会員に偏りがちな可能性があった点である。第三は、質問紙調査、インタビュー調査ともに、後方視の調査であったため、記憶が不正確な面があった可能性があることである。

今後の課題は、虞犯少年をも視野に入れて、反社会的行動を抱える少年の早期支援のあり方について、BBSのみならず、他のボランティア団体の状況も含めて検討していきたい。さらに、非行少年支援の方法は、非社会的行動（不登校、引きこもり等）を抱えている少年への支援にも援用可能であると考えられるため、

家庭、学校から社会へという直線的なプロセスから一旦逸脱せざるをえない少年を
対象とした支援の実態や課題を探求していきたい。